

島木赤彦

島木赤彦

新井章著

新 井 章 (あらい・あきら)

大正13年10月，長野県に生まる。國學院大學文學部卒業。現在，駒沢短期大學講師。

著書『小倉百人一首』『日本の詩歌』『伊那谷の自然と文學』歌集『寒き朝』

現住所，東京都港区六本木 6-1-26

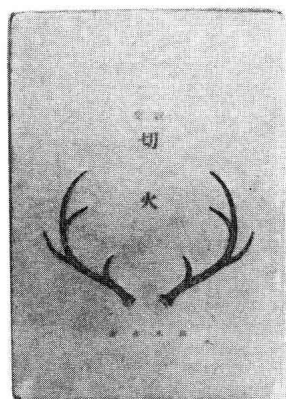
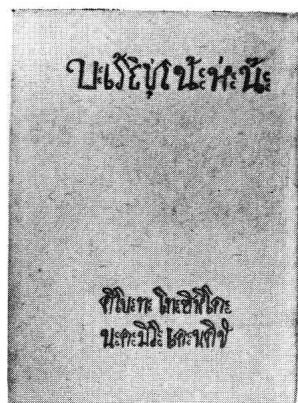
島木赤彦

検印省略

(〇三)二九一五六六一(代) 振替 東京 六一一八〇二〇	(株) 桜 楓 社	〒101 東京都千代田区猿樂町二一八—十三	著 者 新 井 章 発行者 及 川 篤 二 印刷者 柏 原 義 治	昭和五十二年九月十五日 初版印刷 昭和五十二年九月二十日 初版発行	定価は箱に表示 してあります。



下諏訪高木の柿蔭山房



第一歌集『馬鈴薯の花』

大正二年七月 東雲堂書店刊

第二歌集『切火』

大正四年三月 アララギ発行所刊

第三歌集『氷 魚』

大正九年六月 岩波書店刊

第四歌集『太虚集』

大正十三年十一月 古今書院刊

第五歌集『柗蔭集』

大正十五年七月 岩波書店刊

序

信州の人の心は深い。とりわけ伊那谷の人びとの心は美しく深い。

この本の著者・新井章氏から、私は信州の、とりわけ伊那谷の人びとの心の美しさと深さを知った。

折口信夫・高崎正秀両先生の学統に共につながるものとして、新井章氏と私との交遊は長い。時にはむしろ、氏に、私は兄事して来たといつてよい。いくたびか氏と重ねた旅も、ことごとくは信州への旅であった。それも諏訪湖と諏訪湖周辺への旅であり、つきつめていえば、そのほとんどが島木赤彦への回帰の旅であった。

まさに諏訪湖の氷ろうとするときにも、更にまた、杖突峠を超え、分坑峠に至り、遠く高遠の桜の輝くあたりをのぞみながら、話題は常に島木赤彦の人と歌が中心になった。熱心さはこの本の著者において激しかった。私が例えば、宗良親王の人と歌に話題を転じても、すぐさま島木赤彦の人と歌が話題の中心となるのは、もっぱらこの本の著者の情熱のためであった。かくして、諏訪湖とその周辺のみならず、私たち二人は、富士見公園に行き、広丘村を訪ね、

「高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも」と島木赤彦が歌った、その「高槻のこずゑ」を共に仰ぎみたりした。私は、只、仰ぎ見ていただけなのだが、この本の著者は、「すでに春なりという喜びの情が美しくあふれた一首である」と鑑賞し、「この一首は万葉集をよく学んだ結果を示している。画家が名画の模写をするのも同じ道理であろう」と正しく指摘している。ある日、共に柿蔭山房を訪れたとき、この本の著者は、胡桃の木の前から動こうとしなかった。おそらく島木赤彦の「或る日わが庭のくるみに囀りし小雀来らず冴え返りつつ」という歌が激しく胸の中を去来していたためであつたろうと思われる。島木赤彦の歌に詠まれている風物を、この本の著者は一度たりともゆるがせにはしない。

新井章氏の、名歌鑑賞の精緻さは、既に一冊の『小倉百人一首』鑑賞において示されているが、島木赤彦の秀歌鑑賞において、それは一層美事に輝いているといつてよい。そこには、同じ信州人としての美しい血のかよいあいが認められる。

信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ

この歌について、この本の著者は、「へいつ春にならん」というところには感情のたかまりがあり、それが以下の静かな客観描写にうつるところに無量の思いがこもる。〈空のいろ〉と、静かに言いおさめているあたりは氣息の細りをさえ感じさせる」とのべている。まことに行きとどいた鑑賞だといふべきであらう。加えて、その空は「おそらく寝ていて、頭を横に傾けて

見た空であつたろう」と鑑賞しているのは、信州・富士見高原で療養生活を送った、あたかも堀辰雄の『風立ちぬ』のように夫人との美しい愛の日々を重ねたこの本の著者において言えることであつて、その感情移入もまた、自然に人を納得せしめるものがある。

島木赤彦の「教育評論」や童謡などにも新しい目をそそいでいるのもこの本の魅力であり、国語教育に関して、島木赤彦が「方言は愛郷心を継ぐべし。方言改良の議俄かに同ずべ可らず。――諏訪に諏訪言葉あり、松本に松本言葉あり」と発言して、当時の国語教育の方言撲滅の方針に批判的であつたことに注目しているのも重要であつて、特に、島木赤彦と宮地数千木・岡麓・平福百穂との交遊をのべているあたりも示唆深い。

新井章氏が、この本をまとめつつある間に、私は、角館の平福穂庵・百穂父子の墓を拝し、大島にわたつて、土田耕平を偲んだ。いわば私は、この本が完成しつつある間、より遠く島木赤彦の周辺をめぐつたにすぎない。

この本の著者たる新井章氏は、厳密な「アララギ」派の歌人であるのみならず、真実、暖く、誠実で、敬愛すべき人である。島木赤彦への正しい回帰と展開は、まさに、この人と、この本によって約束されると私は信じて疑わない。

昭和五十二年一月七日、伊那市天龍川のとりにて

島木赤彦 目次

序

阿部正路

島木赤彦論

一 「アララギ」の発生と発展	二
二 広丘村の赤彦	一八
三 赤彦の随想と評価	三五
四 赤彦の心境	三三
五 赤彦の中心思想	三七
六 赤彦と童謡	四〇
七 赤彦と百穂	四四
八 赤彦と麓	四六
九 赤彦と数千木	五三
十 赤彦の言語観	五九

秀歌鑑賞

一	『馬鈴薯の花』以前	九二
二	『馬鈴薯の花』	九六
三	『切火』	一〇六
四	『氷魚』	一二三
五	『太虚集』	一三四
六	『柿蔭集』	一四八
	島木赤彦略年譜	一八〇
	秀歌索引	一八五

あとがき

島
木
赤
彦
論

一 「アララギ」の発生と発展

「仰臥漫録」（子規）の明治三十五年三月十日のくだりに、

午後四時過、左千夫蕨真二人来る。左千夫紅梅の盆栽をくれ、蕨真鯛の鮓をくれる。くさり鮓といふ由。五時蕨去る。夜、左千夫歌の雑誌の事を話す。九時頃去る。

とある。伊藤左千夫は、子規を中心に短歌雑誌をはじめたいと考えて相談したのであろう。しかし子規は半年後になくなった。翌年の六月、蕨真と左千夫とが中心となって、根岸短歌会の機関誌「馬酔木^{あしび}」が生まれた。その時すでに島木赤彦は信州で同人誌「比牟呂」を出していた。「比牟呂」は「馬酔木」より半年早い。

いませりし病の床に一度もはべり見ずして今ぞくやしき

赤彦の子規追悼歌である。子規は三十五歳、左千夫は三十七歳、赤彦は二十七歳であった。

左千夫と赤彦との初対面は明治三十七年十一月、左千夫が諏訪に出かけて行った時である。

赤彦は同志と左千夫を迎えて歌会をひらき、左千夫は信濃の山を喜んで一週間も山の湯に滞在した。左千夫の「寂しさの極みに耐へて天地に寄する命をつくづくと思ふ」を赤彦が書いて諏

訪の富士見高原に歌碑が立てられるという深いまじわりは、その時からである。

「馬酔木」が「アララギ」となるまでの経路は、赤彦の「ヒムロ」が「アララギ」となる経路とはちがって多難であった。「アシビ」は五年目に名を「アカネ」と変え、三井甲之の手に移ることになった。そのころ左千夫は思いのほかの逆境におかれたのである。

その左千夫にとって一点の光明となったのは、蕨真が千葉県で「アララギ」を出しはじめたことであった。「アカネ」に不満を抱いた人々は「アララギ」に移ることになる。そのことを土屋文明は「この程度の離合集散は一般文壇、更に一般社会の現象に比べたら、数ならぬ小事といふことも出来るであらう」（『伊藤左千夫』）と言っている。見のがしてやれという意味であらう。信濃で赤彦を主宰とする「ヒムロ」は、おだやかに育っていた。赤彦は「アララギ」の誕生を祝って、「ヒムロ」誌上で、「蕨真、蕨檀堂君等の新計画にて、今度雑誌『アララギ』が生れ可申候。一号は来月十九日子規居士七周忌に発刊の由、根岸派諸同人近來益々活気を加へ、新しき興奮を生じ来り候こと喜ばしき現象に候。九十九里浜の波の音は永久に春なりと左翁が申され候。吾人は新生児『アララギ』が、永久に春の暖かさと活動力とを持して進むべきを信じ申候。発行所は上総国山武郡睦岡村埴谷蕨方に候。諸君の盛に投稿せられんことを祈り候。』（『赤彦全集』第七巻 三七六頁）と言っている。同人諸君に「アララギ」への投稿をすすめているあたり、いかにもさっぱりしている。子規の歌風や万葉集の精神を世に打ち立てることが、

短歌のためだけでなく、いわゆる世道人心のためにも必要であるという考えが、赤彦の胸に強く起っていたからではないかと思われる。

赤彦は当時すでに歌人として立つ決意を固めつつあった。教職を辞して養鶏を始めたのもそのためであった。しかし踏み切りがつかず、その翌明治四十二年三月、東筑摩郡広丘村小学校長として赴任した。教育界が必要な人物として呼びもどしたのである。しかし単身で赴任したところをみると、静かに考える時間を持つとうと思ったのであろう。半年後の夏休みを迎えて、それまで育ててきた同人誌「ヒムロ」を「アララギ」に合同させた。左千夫と固く腕を組んだのである。

左千夫の私の強さを人々は嫌って、しばしば離合集散の原因となったが、赤彦には赤彦の自信があったのであろう。「ヒムロ」の同人に告げる次の言葉は、よく情理をつくしている。

比牟呂同人に告ぐ

上総の「アララギ」が東京に移つて新しき活動に入らんとする時「比牟呂」は自ら進んで「アララギ」に合同した。「アララギ」「比牟呂」と力を二にして働くべき時で無いと信じただからである。

「比牟呂」が生れてから七年になる。七年の間には多少の困難もあつた。幾多の挫折もあつた。只其の困難を嘗め挫折に遇ひ乍らも、兎に角七年の日子を持続して今日に至つた。

多少の奮励と若干の径路とは、「比牟呂」同人に取つて楽しき追想である事を信ずる。斯る楽しき追想と新しき希望とを持して「比牟呂」は「アララギ」に合同する。

「アララギ」を日本的とすれば「比牟呂」は地方的であつた。「アララギ」の存在を社会的とすれば「比牟呂」の存在は家族的であつた。社会的の者が必要であると共に、家族的の者も必要であるとすれば、数年の後「比牟呂」は再び信濃の山中に生れるかも知れぬ。只今日の場合二つの力は何処迄も一となつて働く必要ありと信ずるが故に合同する。合同の理由はと問へば是れ丈である。

「比牟呂」同人は殆ど信州同人である。信州人の活動がアララギ誌上に存続し発展しつつある間は「比牟呂」は永久に其の生命を持続するものである。二つの力は岐れて東西に働いて居た。二の力は合して今後中央の一所に集注する。集注する力は全力でなければならぬ。「比牟呂」同人の努力が永久であることを思うて合同の辞を終るは愉快である。

「ヒムロ」の根はそのまま信濃にのこしておいて、その力を東京に進出させようというのである。結果は現在その通りになっている。「アララギ」をささえる会員の数は信州が圧倒的に多い。

赤彦は「ヒムロ」と「アララギ」と力を二にして働くべき時でないと信じるからと言っているが、それは経済の上で最も明瞭な事であつたろう。「アララギ」の赤彦追悼号（大正十五年十